

利尻島における金比羅、不動信仰

工藤 浄真[※]

はじめに

利尻町立博物館では、昭和56年度より利尻島内における民間信仰を主要テーマとして調査を実施してきた。現在までに四領域に亘る信仰をテーマとして取り上げ、その調査を行ない、その成果を発表し報告してきたものである。今年度は、金比羅と不動の各信仰について調査を行ない報告するものである。

1. 金比羅信仰について

この信仰は、日本国中に広く漁業並びに航海業に従事する人達に依って信仰され、全国に約七百社の分社が数えられている。

本宮は、四国香川県 琴平町にある金刀比羅宮で山号を象頭山と称し、他の民間信仰の神社と違った名称を有する。



第1図 利尻島内金比羅神社・不動信仰分布図

※ 浄土宗専称寺住職 利尻郷土史研究会々長

島内には、社殿建築物を有する集団信仰団体は4カ所あり、その中3カ所利尻町内にある。東利尻町には1カ所があり、その歴史は何れも古い。

個人的なこの信仰と同様島内随所に見られ、他の民間信仰とは変わらないものがある。

しかし、他の民間信仰に比較して、信仰内容が深く、祭礼行事も活発であり、根強く維持され、この意味では旧村社と同格に近い権威を以て運営されてきている。

2. 金比羅信仰とその起源について

(1) 金比羅神は本来インド朝で仏法守護神であった。

日本に仏教伝来して以後、航海安全の神という事で独立した信仰内容を具備され、日本古来の神々として祭祀されるようになり、何ら奇異、異和感をもたない漁業神として変容し今日に至っている。しかし、他の民間信仰の神に比較すると利尻島に於ては金刀比羅神の信仰の内容は守られている。

更に利尻島に於ては、明治4年、(1871年)の天塩国山口、水戸藩書類に依ると、この時既に社殿をもつ神社が6字あって、「金毘羅社、一字」の記録がある。注(1)

また、安政6年、(1859年)頃の利尻島一北部トマリ付近の図面には、6字。東南部ヲンネワキ付近……には4字の神社が確認できる。注(2) しかし、現存する金刀比羅社はそれらとの関連性は考えにくい。

従って金毘羅信仰の存在は安政年間当時から認められるが、明治4年3月に水戸藩が開拓使に報告書、「当藩支配所調書」の中の年中行事には他の民間信仰行事の殆ど認めれるが、この祭礼行事は記載されていない。注(3)

明治8年の佐藤正克書中のトマリ記字中に「淫社」の2文字がある。これは民間信仰神を祭祀する祠堂である事からも、今ここで報告する信仰神を考える意味から何らかの依所となるものと考えられる。

現存するその民間信仰である金刀比羅信仰は直接的には明治20年代にその起源があったものである。

3. 鯨建網と鱈釣の漁業者の関係について

以上の島内の各民間信仰とその社殿建築物等の関係をみるに何れも鯨建網漁業者並びに鱈釣漁業が密接な係りをもっている。

金刀比羅宮の社殿は、利尻町杓形字栄浜、同町字種富町、同町字泉町の利尻町の3カ所である。また、東利尻町鬼脇市街地の利尻小学校近くである。

その中、上記2カ所は現在部落神社として位置され後者の2カ所は広く両地区内の信者により維持運営され祭礼行事を執行し、漁業親方衆の維持信仰から漁業に従事する一般漁民によって管理運営されるようになってきた。

(1) 栄浜神社

部落のやま中央の道々の山側に海に面して建立されている。注(4)

この神社の拝殿の掲額には、「金刀比羅宮 明治二十四年三月 奉二夜三日祈禱漁獵潤沢守護修」とある。

後「明治四十三年十二月二十六日、願主、日中、幌分辺崇敬者。祭主 常盤井武胤」とあり、更に掲額文字に「奉斎稻荷神社 社殿新築。再建落成、正遷宮」とある。

その事から判るように、金刀羅宮は同格祭祀とも考えられ、現在でも「金刀羅さん」と言う人が存在する。

大漁を願う漁業神であると同時にこの地域一帯の守護神でもあったのである。

また、これだけの祭礼行事を報行するには当時としては有力なるその地域の漁業者であったと考えられる。

それらについての詳細については不明であって手がかりとなるものが残っていない。

更に、社団法人、日本水難救済会、杏形救難所発行の詰所落成記念、利尻島杏形の海事史。(昭和45年)に依れば、1889年(明治22年)の記録の中に、「四国香川県琴平に於て本会の創立発会式を行ない、本部を同地に置く。初代会長に金比羅宮司、琴陵有常就任する。」とある。

それで考えられる事は、直接に利尻との関係をもたなかったにしても、間接的には何らかの影響力はなかったのだろうかと言う事である。

もう一点は年代的に接近している当金比羅信仰との関連性は全くなかったとは考えにくいのである。

(2) 種富町神社

由来について

この金刀比羅神社は種富町の部落神社として祭祀維持され、新自治会館内に板戸で仕切られている。

現神社の前身は種屯内神社と称して、北見富士神社に昭和7年12月に同神社宮司常盤井武知氏の働きかけがあって合祀したものである。

それは、昭和初期の未曾有の不況時にあって経済的な理由により、村社でも本社でもある北見富士神社に合併し廃社とした。しかし、漁業で生計を立てている部落民にとっては、豊漁を願う漁業神を祭祀する堂宇が身近にないことが情情的に納得できず、部落民の総意に基き、神社再興に踏み切った事から現神社が実現したと伝えられている。昭和10年頃であったと伝えられている。

それ以前の神社は、明治32年5月19日に創立されたもので「市杵島北売命を祭神とする巖島神社の分社とし、氏子数96戸を有する部落神社であった。旧社殿跡地狛犬の石像1対が残されている。(大正6年発行、宗谷支庁管内拓殖要覧。利尻町博物館所蔵)

それで、同部落の浜のイナオ崎と呼ばれる地名の所に祭祀信仰されていた、金刀比羅神を移転遷座して、社殿を再建し、次に旧自治会館内に遷座祭祀してきたと言う。

それは、規模の大きい新奏神社程の社殿であったと言われているが理由は不明である。

祭典について

現在の金刀羅神社の祭神は、秋田県出身で当部落民の児玉平太郎氏の先代毅氏は、秋田県花輪村の農村より、函館、石狩を経て明治35年頃利尻に来島し、現在地に住み漁業を営んだ。児玉家は本来神職であったが、23代兵衛氏、24代兵作氏の父子三代は鱈釣漁業を営み、その一方従来からの金刀比羅さんを崇敬し、日夜怠る事なく守り続け堂を建立し祭祀してきたものが現在の種富町神社の神体である。従って創始者は児玉氏で個人の信仰祭祀から部落という信仰集団による崇拜神となったものである。また、左右両脇に30センチに約一米程の「事代主命」「大物主命」の掛軸文字が祭祀され、木製神札2枚ある。

中央正面に祭祀する神体は利尻島内に例のない、三神体木像で極採色されている。台座の模様は仏教的形態に類似している、三神体の中心の神体は仙人風であり、その一段の両脇を翼を広げた霊鳥であり、岩石状の断面に安置されている。これが金刀比羅の中心的本源的な神体と考えられる。大きさは台座共約50センチで、中心になっている神体は約25センチ程である。(この由来は不明)

祭具並奉納物について

神具に大太鼓と包太鼓の2個ある。

大太鼓は、「昭和28年9月、東京都浅草亀岡町、南部屋五郎右エ門」の焼判文字があり、「奉納大野与三郎、(富山県人)杓形町字種富町」とあって、直径45センチの胴長太鼓である。包太鼓は古く使用に耐えない状態で文字等は全く判らない。

幟や幕は旧自治会館内に保管されているが、比較的年代の新しい物が多く、古くなって使用に耐えないものは見当らなかった。それらの寄進物は数えきれない程である。また、どこの神社にも見られる提灯や絵馬は目の届く範囲内ではなかった。

供物台として使用される「三宝」は10数箇あり、山本展治の氏名があった。

旧自治会内には、祭典相撲や神社に関する賞状類が張付けられている。その中に幟の寄進に対する謝状として、常磐井武知氏名により、小倉福三、畑中明、中田喜代治、中田真吾、張間徳次郎、山下喜市、片山滝史の各氏等があった。新自治会館内の神前の紺幕は昭和55年6月に張間栄次郎、草間トキの両氏が寄進している。旧会館内には、布地に墨書の、「大正11年10月7日、金刀比羅大権現、願主、佐藤康蔵」布札がある。これはその当時祭礼行事が行なわれていた事を物語っている。

祭礼行事

例大祭は毎日例祭日行なわれ、月例祭も行なわれていたのは鯨漁時代のようなものである。現在は郷土祭典時の6月に合せ執行されるのみである。

維持管理運営についての変遷

明治32年5月19日創建された神社は厳島と祭祀され、昭和7年12月に北見富士神社に併合された。そして、昭和16年頃に再興されたが、これは児玉氏の祭神を以て種富町神社とし、以来今日に至っているが、昭和41年に1月に旧自治会館内に更に遷座している。

鯨漁時代までは建網業者等部落有志者によって経済的に維持されてきたが現在は、自治会内に神社委員を組織し、委員長に一郷猛夫、委員に斉藤勝男、加藤盛之助、斉藤武正、柴田徳蔵、清水良治の各氏等によって運営され、総責任者は自治会長宮崎安太郎氏になっている。

部落神社としての性格が如実に表われているのは、昭和41年1月、(未確認)の社殿修築の際の棟札に、「奉納 社殿修築正遷座祭執行、崇敬者代表、今野新三郎を筆頭に、高島金次郎、鎌慎一、柳谷福太郎、鎌田定吉、草間時三、柴田作五郎、宮崎富太郎、後藤吉春、田村正一、阿保清吉、小石由太郎、谷永松蔵、北見富士神社 宮司 正階位 常磐井武知」とある。これは宮司以外全員が種富町住民である。

また、この工事に際し、寄付者芳名板が旧会館正面に掲示されている。次にあげると、中川岩太郎、(厚岸町)、斉藤政敏、大友啓治、梅津和朗、安田康之、(荒田商会)。宮下繁雄、遠山正二、利礼水産、④漁業部、(富山県)。柿元恒吉、常磐井武知、佐野清、高島金次郎、宮崎万太郎、村谷喜一、鎌田慎一、児玉平太郎、渡辺直治、津田喜重、惣万正男、浜松七次郎、平田鉄蔵、大島政治、種富町消防団、大沢銀次郎、北村良一、南政義、小柳和夫、草間時三の各氏等29名である。

上記の者は全て金刀比羅信仰者とはいえないが、特に漁業神として護持されてきた経緯はやはり信仰心の表われとみてもよいのではないのだろうか。

更に、この地域住民の先祖の出身地は富山県、福井県、山形県、秋田県、新潟県、青森県に亘っており、部落神社という性格上住民全員が信者とは限らないが、出身県の特徴のある信仰集団ではなく、容易に受容されている。

(3) 泉町金刀羅神社

この神社は部落神社ではなく、沓形地区内 住む信者の集団によって祭祀され維持されている。

飯沢直次郎は明治23年に来島し漁業に従事し、磯漁師から身を起こし後に鯨建網業を経営した。飯沢氏は富山県新川郡磯沢村の農家より明治18年小樽に住して後沓形村亦稚、(現在の泉町)住居を構えた。明治35年に漁業の都合上、ルランドマリ、(現在蘭泊)に移転し番屋兼家屋として鯨建網を営み大いに豊漁を極めた。現在の角谷本家の東隣り位置に当る。

飯沢氏は明治43年に四国琴平村の金刀比羅宮に直接参拝し、その時に分霊御礼を受け招来したのが金刀比羅神社の始まりである。

帰島した飯沢氏は兄弟分に当る泉町商人村上石松氏宅に寄り、一時的に分霊御礼を預かった、その後1か月半に夢告を受けてより社殿創立の話となり具体化した。

そこで、二氏は祠堂建設する事を前提として相談の結果、場所と便利の地理的条件を考え、泉町の丘に建立する事にし、九尺に九尺の堂宇規模を決め、地元泉町に存在する鱈釣業者、鯨建網業、

信仰賛同者達と相談した。発起人に、飯沢直次郎、藤井松蔵の両氏、明治44年の大祭日を期し建立創始したのが明治44年10月9日であり、村上石松宅の仮宮より新殿に遷座、落成を見たのである。

社殿新築発願主、飯沢直次郎、藤井松蔵の両氏を筆頭に、村上石松、葛西重五郎、寺田長吉、新谷清次郎、田尻長蔵、竹口浅次郎、押田徳次郎、惣万三松、管谷忠吉、宝来梅吉、松下秀吉、川北福太郎、佐々木万平、蔵栄太郎、嶋村六太郎、伊勢福蔵の各氏等の寄進により、大工棟梁、塩谷常吉氏により新築されたのである。

次は、昭和11年に信者の参詣が年々増加したので、今までの9尺に9尺の拝殿では狭くなり、増築の議が起り委員に、竹口石次郎、大平松次郎、梅津徳治、沢谷源太郎、原田末吉、伊勢亀五郎、船谷吉次郎の各氏等修築委員として、同年8日着工、10月9日に大祭と同時に落成式を、北見富士神社神掌である前回創立時祭主の常盤井武胤氏から武知氏と変わり祭主として執行している。宮大工は棟梁の浦清太郎氏、大工職宮本義口、石工港常治氏等で屋根を御堂作りとした。

三回目は昭和15年10月に社殿移転完成している。他人の場所ではよくないとの事と参道の丘に左にそれている為約20米計移動、現在地の建物である。委員には、飯沢竹蔵(直次郎の子)、渡辺直治、柿元福三郎、高島金次郎、南末吉、中谷竜太郎、村上石松、矢田福蔵、寺下秀蔵、鈴木亨、葛西重治の各氏で造営された。また、この移転工事は泉町青年団の労力奉仕もあったようである。

次は、昭和17年9月に参道階段の改修築工事が行われ、宗田末吉、大平松次郎、竹口石次郎の各氏が中心になっている記録がある。

次の工事は社務所として拝殿右側に4坪程の増築工事を行ったのは昭和38年6月であり、成田岩吉、竹口久利、宇賀野義雄、竹口石太郎、安田為男、葛西由太郎氏等が世話人となり工事を進めたものである。

寄進奉納物

奉納物は数十点あり、先づ、飯沢ハツ氏の1尺8尺太鼓が大正2年8月。上杉巳之助氏の錦の旗は大正5年6月、吉田喜之八、惣万由松両氏の提灯1対がある。

鳥居掲額の「金刀比羅神社」(彫刻文字)は昭和11年10月に梅津徳治氏の寄進で、拝殿掲額は、山形羽後国飽海郡荒瀬村、佐藤岩次郎とある。(年月不明)

賽銭箱は当初のものは古く判読できなく、2個目は、昭和2年6月に寺坂作太郎氏寄進したもので現在である。

また、紫の横幕3枚、提灯、絵馬、歌、絵額等があり、小太鼓もあるが使用不能である。他に寄進者名板が拝殿左側の壁に掲示されている。

祭礼行事について

創立当時より毎月10日の例祭が行なわれ、例大祭の10月10日に前日より行われてきた。鯉漁の終わるまでは、地元村社の宮司により司祭され、米、御神酒、鏡餅、生魚、藻物(昆布、ワカメ等)

晶物、果物、お菓子、塩水、赤飯等が供えられ、幟が立ち、御輿を出し、余興行事には、歌舞技芝居や相撲、盆踊りをした事もあり、盛大に執行されたようである。

人手不足になってからは行事も以前のように出来なくなってきている。この他に村社の祭典には応援協力の意味で御輿渡御の行列に、戦後に村社より譲り受けた御輿を参加協力してきたが、現在ではこれも人手が足りず困難になっている。拝殿内にそれらの用具があり、最近の物に見える点実際に行われていた事が証明される。

祭典について

当初の分霊として招来されたものは、神殿左側に祀られていたものが神体であるが、改築移転の際に新しく現在の祭神に変わっている。

最初の神体は、幅20センチ、長さ1 m程の「全刀比羅宮」と記された対になった木札タイマである。

正面に神体として祭祀されているのは、四国金刀比羅宮の祭神である。「大国主命」と「事代主命」である。随神として左側に合祀している神は夷様と大黒様である。この随神は、鯛と獅子頭である。鯛は長さ40センチに幅24センチ程のもので赤で採色し、獅子頭は30センチ角位の大きさのもので、寄進者の岩島慶松氏が稚内へ移転し、20年目に泉町に戻った事を記念し、また、金刀比羅さんの加護のあった事を感謝し、自ら彫刻し寄進した神体である。記念の年に当たるのは昭和16年10月である。一時的に当時の金刀比羅神社総代、田尻多一郎氏宅に返納したものを昭和34年10月10日に、北見富士神社社掌、常磐井武知氏の司祭により遷座し合祀したものである。

維持管理について

鯧漁の終る昭和30年頃までは沓形地区内に居住する、鯧釣、鯧建網の両業者達の信者に依って維持運営されてきたものである。

その後、鯧漁皆無時になって、泉町部落一同の選挙により、昭和33年9月に大祭を前にして、8名の総代及び世話係を選出し、祭典その他のこれに関する行事を執行されてきた。

この時の役員は、総代長に成田岩蔵、田尻多市郎、小岩長松、宮下繁雄の3氏が総代となった。世話人には、市村正雄、竹林兼太郎、成田直次郎、鈴木末吉、長谷川勝四郎の5氏となっている。

現在は自治会長である石塚力男氏が総代長として継承し、各部落2名の委員の選出により維持運営されている。

拝殿内に掲示されている寄付者を数えると二百名を超える数になり、沓形地区全般の信者から形成されている。

他の部落神社と違い、泉町に建立されている神社として、泉町部落を中心として維持されているが独立し、旧村社との直接的な関係をもたない神社である。

泉町（旧名亦稚）金刀比羅神社の由来並二御守護（利尻町立博物館）

明治43年、当村建網業者飯沢直次郎氏は、四国讃岐の漁師の崇敬神、琴平村に鎮座まします。金刀比羅神社へ参拝、木製の「たいま」一枚御受け、（中型）して帰村しました。当時は今のような交通の便はなく、小樽へ出るにも蒸気船が便りでありました。杓形、駕泊、鬼脇、天塩、遠別、益毛等々寄港して小樽へ出たものです。帰りも又寄港を重ねて三日位かかり杓形へ帰ったものです。

飯沢氏も御礼を御受けして帰られ、日頃より仲の良い兄弟分の村上石松氏の宅に一休して永の疲を直しに一杯召上り、御礼を村上氏の神棚へ上げたまま蘭泊の自分宅へ帰り、其のまま御札の事を忘れて居りました。

1ヶ月余りたって或朝、夢に白髪白衣の老人が現れて見せました。その時、はっと気付き、村上氏の神棚の事を思い出し、あの御礼を忘れて来たと思い出し、朝食をして早速わらじをはいて村上氏の宅をおとつれました処、村上氏も飯沢氏と同じ夢を見て気がつき、御札を届けべくワラジをはかんとせし時、飯沢氏が来て、実は今朝の夢の話をし、村上氏も同じ夢で実にあらたかなる神様である故、亦稚の氏神様に祭ろうではないかと言う事になり、両氏の話がまとまり金刀比羅様は漁師の神様であるから翌年の10月10日は金刀比羅様の祭日であるから、其れまでに神社を新築する事になり発起人、飯沢直次郎、藤井松蔵、世話係り村上石松、葛西重五郎、寺下季蔵、押田徳太郎、宝来梅吉、集に集を重ねて九尺二間の神社が出来上りました。 以下略

昭和四十一年六月吉日

杓形本町 岩島慶松 謹書

4. 政泊港神社

本年報第5集に報告した中の1部に記してあるが、昭和30年頃から部落神社に位置付けられると同時に政治部落民である宮下要一氏が鯨漁時代に定置漁業者として、毎年大漁祈願に巡回来島していた小樽金毘羅院からの祈祷者に依って、この信仰を持つようになり、神体はどんなものか不明であるが祭祀していたが鯨漁皆無になって稲荷神をも祭祀していた事もあってか、建網業者坪田の稲荷社に、他の政泊にそのような所もなく、合祀を依頼したものである。

滝沢利作氏は刺網業者（鯨）であったが宮下氏同様にその信仰に入り、同じく現在の政泊港神社に合祀されたものである。

5. 鬼脇金刀羅神社

鬼脇市街地中央の奥地に、拝殿は間口5間に奥行2間続いて神殿2間に3間の鬼脇の金刀比羅神社とその建築物等が建立されている。

社殿に向って左側の前に参道に面して高さ約3米程の石碑がある。

自然石に彫刻文字で、表面に「奉納、金刀比羅神社」と左側に「遷座六十五年記念」とある。裏面右側に、「昭和31年9月10日」とあって、次の氏名が見られる。

吉田定吉、山田由之助、石川善之助、旧淵市次郎、高野栄太郎、吉田利三郎、種谷鶴松、三浦徳治、菅原銀治、神岩蔵の10名、石工、吉田定吉、その左右に本間勝、杉浦亘とある。また、社殿前に石灯笼1対が建立されているが、提政治の名前が刻ざまっている。

上記から判るように、遷座したのは明治25年となる。従ってそれ以前に創始建立されたと考えられている。

昭和11年10月9、10日に起した「金刀毘羅神社、金銭出入帳」中の記録に依ると、「建立明治19年老久化の為修築す」とある。従って、鬼脇金刀羅神社は百年以上の歴史を有する事になる。

しかし、創立に係る由来因縁、昭和11年10月に至る間の変遷についての記録、資料は皆無に等しく、その言い伝いも何もない。これまで調査経過で判明した事は地元の漁業に関係する有力者に依って戦前までは祭礼行事や維持管理がなされてきている

また、残っている上記資料にも欠落部分があって詳細については不明であるが、判明した変遷をたどってみるに次のようになっている。

鯨漁の終る、昭和31年9月10日に上述の石碑が、6,250円の工費で建立され、続いて翌32年に鳥居新築工事が1,275円の工賃で新築されており、同じ33年3月30日には清川神社の祭神である石碑恵比須様と山の神を合祀し、その為の工事も行なわれている。

暫く間をおいて、昭和42年10月に、10,670円で社殿小修理を実施し、同じく48年に115,000円で鳥居を新築している。更に49年には68,920円の工賃で社殿の修理したが「建立明治19年老久化の為修築す」という事で、昭和54年9月に、総工費1,807,200円で大規模修築工事が行なわれている。

社殿の大きさは、5間に2間で神殿は1間に3間のものである。

記録によると

発起人名

石川 篤、間宮竹松、田淵市次郎、野宮武石、鶴谷昭吉、上田博志、飯田光義、小林良雄、橋悦徳、俵谷芳勝、川村松太郎、常名 雄、加藤正男、上田 智、熊中康一、神 岩造、俵谷敏治、川村吉太郎、橋 功、和田 昇、伊藤敏春、佐々木節男、計22名となっている。

主な寄付者をみると

30万円 鬼脇漁業組合。25万円 東利尻町。20万円 石川 篤。10万円 間宮竹松。10万円 中田組。5万円 田淵市次郎。同 松村建設。同 神岩太郎。同 木村豊美。3万円 笠島善太郎。同 道場幸雄。発起人～2万円で合計寄付金額2,952,000円になっている。

昭和57年には、屋根塗装、水道の両工事を実施している。塗装は313,070円の工事費で、水道は229,380円の工事である。

創立当初の位置は、旧北見神社の近くといわれ、次で移転したのは6年後の明治25年となる。これは、「星霜百年」（利尻小学校発行）の中の記録の北見神社新築の年代と一致する。しかし、その関連性についてはよく判らない。

祭典について

神殿内に更に御堂（1間×1間余）があって中は空堂であるが、紫布で覆われた大きさ15センチ余のものが台座として置かれている他に何も無い。これが2個である。それは、祭神とする「事代主命、大国主命」を意味していると考えられる。祭壇右側には、幅15センチに長さ1米程の板状の「金刀比羅宮、海上安全、大漁満足」「明治38年10月」「利尻郡鬼脇港、船木梅吉」と「明治39年11月」のものと2枚の金刀羅神札がある。これが分霊された神体、最初の祭神ではなかったのかと考えられる。

また、左右両脇に石像神体が1対安置されている。これは清川神社を廃し、祭神を合祀したことによるものであって、「えびす様」「山の神」で、自然石に彫刻採色されている。左に遷座している山の神は、幅45センチに高さ60センチ程の平板状で、男女と思われる二体の像が肩を寄せ合う形態で浮出されている。えびす様は立体像で約50センチ程で釣竿を持ち漁業神を表わしている。

神殿御堂と左右の何れにも神鏡と御幣が立てられている。島内には余り見られない特徴的な神殿内部になっていて壁代、簾等は最近新調されたものである。

昭和53年8月から港祭りに協力参加する海上渡御時に遷座して神は「えびす様」の神体である。

祭礼行事について

昭和11年以前について知る資料はないが、以後における祭礼行事については、例大祭の記事がある。

昭和11年9月9日、10日に祭典を執行し、寄付金 80円15銭、祭典経費 75円10銭となっている。

昭和18年迄の間の記録はないが、戦時中のこの年には例大祭を10月9日、10日の宵宮祭、本祭が行なわれている。どんな内容か不明であるが、余興に「活動写真」が行なわれ、経費 23円50銭の費用になっている。同19年には、6月10日に「大漁御礼参り」を行ない、9月9日、10日の例大祭には余興に子供相撲大会を、50円経費を以て実施している。昭和20年には、他に4月10日に行なった「大漁祈願祭」も行った記録がある。余興も最も盛んに、祭典を賑やかに執行したのは昭和22年の9月20日の例大祭で、小屋掛をし、コンクール、楽団演奏、角力大会等が展開されている。この経費4,600円であった。

そのようにして、その年によって行なわれなかった事もあったが、昭和35年までは、大漁祈願祭大漁御礼祭例大祭の外にも行なわれ、余興に於ても同様であった。最近では、近年行なわれている「港祭り」の海上渡御に神体を遷座させ、海上渡御に協力参加しているが、例祭での余興はなく、敢て余興と言え、直会でのカラオケが賑やかさを展開している。

現在、例大祭は、約20万円程の予算で執行され、漁業機船一隻当り5,000円見当の寄付により賄なわれている。

信者には、祈禱札が配られ、最も多かったのは、昭和21年の330枚で、昨年は65枚であった。信者数とは一致しないが、変動は同傾向にあると見てよい。

また、往時に習って子供達へ御符代りに、お菓子が与えられている。

また、大晦日から元旦にかけて毎年20人～30人の参詣者があり、今も昔同様に持続している。

昭和29年の例大祭の寄付帳によると、一金壹千円也に、鬼脇漁業協同組合。刃、高橋水産株式会社。利尻回漕店、株式会社北海道銀行鬼脇支店。一金五百円也に、石川善之助。田淵市次郎、吉田利三郎の各氏らの他に、東洋丸。俵谷誠之助。小堀別家。五十嵐由次郎。加藤々吉。三浦徳治。田淵藤九郎。舟積富蔵。神岩蔵。依田新吉。管原銀治。中田平吉の各氏等数十名が記帳されている。寄付者は必ずしも信者ではなく、個々に変動はあるが現在数は殆ど変わっていない。

司祭神主は旧村社宮司に依頼し、神主は白戸、常磐井、佐々木の各氏と変わっている。

維持管理について

戦前までは、料理店「末広屋」の山田由太郎夫妻が中心となって例祭その他を執り仕切ってたという。昭和18年頃より、田淵市次郎、石川善之助、吉田利三郎の三氏総代として、例祭、祈願祭、修繕工事等の責任を負ってきたのが昭和50年代まで続き、以後、現在であるが、これまで約40年間その職務にあった事になる。

石川善之助氏の没後はその子篤氏総代長に、田淵氏の後、間宮竹松氏で、没後、その子掌吉氏、吉田利三郎氏死去後、鶴谷昭吉、常名恒雄氏等総代としてその任に当たっている。

運営管理費は、祭典、修築工事時寄付金を以て、小修理に充て、信者集団の主導に依って維持されている

また、帳簿の初の欄に、米村長六、山田兄君、田中兄弟の三者が寄付係として記されている。昭和11年9月9日、10日の寄付者の各氏名欄には、山田由太郎、田中兵治の各氏連記されている。他にこの姓はない。

寄進奉納物について

現在も金毘羅通りと呼ぶ人がいるように、鬼脇地区における自由な信者が思う存分に祭礼行事が行われていた。記録に見られる「席料」とか「口礼」に伺い知る。

それを物語る奉納物として提灯の寄進者に芸者衆の女性名の連なっている。

また、奉納寄進物には、太鼓、幕、掲額、絵馬等が残っているが、調査時点では社殿内に入る事ができず確認に至っていない。

祭神についても「金毘羅」でなく「金刀比羅」であるという強調する点、沓形泉町の金刀羅神社の祭神と同じと考えられるがこれも確認できなかった。

余興、相撲大会で行司役であった上田一郎氏等の用いた軍配も社殿にあり、大きき約25センチ位である。

鯖建網、蟹漁業、鮪、回漕業等の有力者から現在は機船漁業者の信者になりつつも、鬼脇の金刀比羅さんの存在意義が大きく残っている。

他の記録には、明治31年8月16日創立で氏子数320戸で、利尻郡鬼脇の所在地で無格社、利尻神神、祭神「大国主命」（他4神祭祀）と記されている。

まず、寄進物の中の提灯に、三吉丸船長、願主、永井吉松寄進の直径24センチ、長さ90センチ程の円筒形のもの、それから、同じ大きさ、同形のもので一対になっているが、この寄進者名は、一方家内、松吉、吉弥。森の家内、メ香、福丸。よね家内、君子、よう子。林家、記子、右太子、今助である。

鯨漁、蟹漁の盛況時が偲ばれる飲食店街の芸者衆の信仰をうかがえる。また、白戸勝三郎、みさを両氏の提灯もある。

また、胴長太鼓は直径45センチのもので、「明治32年6月、金刀比羅宮」（寄進者不明）文字が見られ、賽銭箱には、「明治22年9月」と記され、大きさは、25センチに50センチ、高さ30センチ程ものがあって、その古さが知られる。

絵馬には、上記と同年代と考えられる、尾本ユキ氏寄進の馬の絵と、久野スエ氏寄進の布ではり合せた絵の、「牛若丸と弁慶」が掲げられ、比較的新しいものでは、昭和7年12月に寄進した馬の絵（田淵文江の名）がある。

提灯も同様であるが、幕や幟は使用上耐えず消失しており、現在、使用している幕は昭和45年1月を吉日として第五善宝丸、石川篤、第五政運丸、鶴谷正吉の両氏の寄進したものである。幟も同じである。吹流した同年代を新しく、第五善宝丸、山田秀蔵の染文字が記されている。提灯は昭和60年複製したものを使用している。

他に寄進物は神前の約30センチ程の大きさの灯籠一対があり、これは「昭和61年10月吉日、第八善宝丸、石川篤」となっている。同年時に「供物用朱塗三宝3台、第38万栄丸、常名恒雄」もある。更に、昭和55年頃に大漁に感謝して寄付したという拝殿玄関の振鈴房がある。この上の「金比羅宮」の掲額や提灯、絵馬等年代が記されていない。

2. 不動信仰

お不動さんは正しくは不動明王と称し、または不動尊とも言っている。仏教系真言宗諸派中の本尊として祭祀されている場合が多い。

その不動明王には諸相があって本来仏法守護神とされていたが、仏教思想の発展変遷に従い、龍神、山神とも言われる山岳信仰、或いは悪魔、病気、災難等の民衆生活の日常に係わる守護神とし信仰され、特定した信仰集団はないが、利尻島内2カ所、不動尊並びに不動堂が存在している。

前者は寺院本堂内に2体の不動尊像が安置され、後者は不動堂として独立した祠堂に祭祀されている。

当初は漁業神であったようであるが、鯨不漁後はその信仰の内容が変化しつつ今日に至っている。

東利尻町駕泊字栄町、曹洞宗大法寺に2体の不動尊像が本堂内右側の祭壇に安置されている。

これは明治23年、（昭和19年の説もある）（注5）に和歌山県のある真言宗系寺院に所属する修験者、天野磯次郎、（「龍源」の書物もある）氏が、駕泊字リヤランナイ、（現在の湾内）の漁業、（鍊建綱）を営む安達に錫留し、利尻山頂に利尻島鎮守として、不動明王を祭祀し、堂を建立

する事を発願したのが最初である。

昭和23年11月発行の島物かたり「著者 時雨音羽」には次のように記述されている。

明治23年、紀伊国の修験者天野磯次郎という者が、駕泊村の日沼の丘の上に庵室を結び、不動明王の像を安置して、土地の有志の助力を受けながら、五月より七月に至る約百日間の断食修業を行った後、愈々登山を決心したが、この時雷鳥が現われ先導となったと伝えている。

この登山は遂に成功して行者は山頂へ極めた上、此所に止まること数日間、此所に不動明王の分身を彫刻して安置した。現在頂上の北峰に残る小社で、利尻神社と呼ばれたものがそれである。この行者の拓いた道が、現在登山道路の基礎をなしたものとされる。

また、観光「利尻」雷鳥<昭和42年6月30日印刷>(上遠野福寿 発行)には次のように述べている。

大法寺先代住職より広沢現住職に直々教えられた事を率直に申し伝える事に致します。

同人は、九州生れの真主宗僧侶天野竜源という僧侶(九州を何年に立出たのかは不明)、途中托針をしながら明治19年4月下旬、我が利尻島駕泊に渡り、元リャウソナイ安達漁場に旅装を解き食客となり其の間天野氏は利尻岳は人跡未踏万山を開き、是非自分の力で開いて見たいと思い、船頭及び漁夫達と兼ね兼ね相談を重ね、六月漁場切揚げをまって実行する事に決し、海の船頭は変って山の先達となった。

最初、日沼の川添をみざして登り、最後上流に達すると沢は2つに分れ、其の中間の尾根を登り大体の測量を得たもので当日はそこで打ち切り、漁場に引返した。再び尾根登る事数キロ、樹令百余年もの蝦松、トド松の密林。たまたま日洩れする位の木下闇これを過ぐると、こんどは利尻特有の根曲竹の密集地帯に差しかかり、実に難行。一日若衆五、六人にて数十間より刈り取る事が出来な難作業でしたが、不思議な事には其の日から雷鳥が一定の場所を道案内をするかのように尾根を去来するので、天野氏が雷鳥も一役買って呉れたものと信じ、その通り道を開いた所、測量でもした様順調に進み予定より早く第2の尾根に達したものであるが、さあ此処から先が大難所なので、一行は漁場に戻る事をやめ茲に仮小屋を建てて作業を始めた。

雷鳥は、相も変わらず道案内をつづけ、此処五よりの松並に白樺古木が山一面の地に這い、鋸やまさかりでないと開けなかったという。

今の長官碑の処迄乃竹松這松等の密林征服迄三ヶ月の月日を費したところ、想像もつかぬ難事であったとか。

そこより御花畑迄は小笹や小ハン1木が所々に有るのみで、作業も順調であった。

一行は第一、第二のローソク岩に登り、目標に杭を打込み、白布を五幣変りにして戻ったというが、それは大正の初期まで有ったという目撃者が居る。

天野氏は越年した冬は不動明王像をきざみ、権現堂建立に再び来る漁期を待って、二十年の六月

迄現在の所に祠を建て、不動明王を刻み、そこに安置して一切の行事を完了した。

更にまた、次の記録がある。これは、明治29年8月9日の「利尻山観測記」中に

8月3日 快晴霧時々襲来午前6時 燭岩を撮影ス、此日、本泊村民2名不動尊参詣の爲め登山す。

4日 快晴利尻山不動尊の点より山麓名所の角度を測量せり。

また、由来因縁を記した「観光 利尻」の中の「小玉栄太郎断食の記」を記すと

昭和6年8月10日、鷺泊に上陸。同日本泊奥の院神社に一泊。私等には不思議な事に本人は此の神社を断食の処と思ひ、本泊神社の社霊によると此処ではなく利尻山頂だと申され、11日朝、鷺泊営林署主事、当時羽田源明氏に断食許可を願ひ出たが許されず、故に無断で登山し、断食を始めた（中略）

断食する迄の本人の動機は不思議な事ばかり。本人は、性来目が不自由なので医師より治療にまづ専念して居りし処、或る夜夢に利尻岳に行き、不動明王神を礼拝し、出来得れば断食して21日間祈願すると全治すると毎夜の如く同じ夢を見るので、決心して実行する事に踏切ったと言う事です。（以下略）

以上の記録を比較検討してみると幾つかの相違点がある。「島物がたり」と「観光利尻」では、年代に3年間の喰い違い、居留場所、出発地、名前等である。しかし、語り伝いによる記憶をたどったものであり、その資料的価値を言々するより事実を確認できることで充分と考えられるし、由来因縁を明らかに出来る事でよいと考える。

民間信仰神の神としての信仰内容は、以上の四例の記録で明らかであるように、「雷鳥の飛来の不思議」、「白布の五幣代り」「利尻島鎮守」「本泊村民の不動尊参り」、「神道による不動明王神の礼拝」の文字を見ると仏教本来の神から日本古来の神へと変容したものと言える。近年まで毎年利尻登山する数人の人達には老令者が多かったが単なる趣味だけあったとは考えられない。

二体の不動尊像について

現在、鷺泊大法寺に二体の不動尊像が安置されているのは、厨子入採色の像は最初に利尻山頂に祭祀され、厨子入れ尊像よりも、大きい他一体は二回に祭祀された像と言われている。

また、二体共に天野氏の彫刻とされているが、これは事実ではなく、そのような技術者でなかったとの説がある。従って二体とも本州青森県より招来したものだとされている。

また、この不動尊はどの位の年月祭祀されたかは不明であるが、何れも明治年代の中に山頂より腐朽破損から守る為に移されたという。それを建網業主の安達亀太郎氏の建立寄進した「庵」に遷座していたが、安達氏の檀那寺である大法寺に「庵」と同時に寄付され、建物は現在も残っている。

天井裏から破片板に明治22年8月建立の文字があり、大工名も記されていると言われている。

利尻島鎮守を願って祭祀されていた年代は、更に新しく発見された由来記の明治26年説もあるが「庵」の建立年代から推測して明治23年説が正しいと考えられる。

明治28年の利尻山観測日記中に見られる不動尊信者の登山記録から、利尻山頂に建立祭祀した事は間違いないものと考えられる。

また、観光「利尻」の中にある、小玉栄太郎氏の「堂内に入れた」と「雷鳥」の誘導の事実は考えにくい。

何れにしても、不動さん信仰は近年まで存在していた事はまちがいない。しかし、特定された信者ではなく最近では寺院参詣時にお参り合掌する程度である。

(2) 神居の不動信仰

杓形字神居橋の山側向って右側に2間半の祠堂が建立されている、これが不動院と呼ばれているものである。

その不動信仰の始まりは、秋田県南秋田郡戸賀村字塩浜から杓形村字ルランドマリ坂の下の浜に大正5年頃に来島鯨建網業を営んだ、三浦長吉氏が信仰し、祭祀建立したものである。

安置されて不動尊像は高さ95センチメートルの石仏で、コンクリート製の高さ57センチメートルの台坐の上にある立像である。石像右側には、「大正二丑年三月二十八日」とあって秋田県より招来し、漁業神とした可能性が高い。

最上段台坐石の正面には秋田県の住所と「利尻郡杓形村ルラン泊、漁場、三浦長吉」彫刻文字がある。

三浦氏は蘭泊で数年間、鯨定置業を経営したが、この地を去った。だが、不動堂はそのまま残され、蘭泊、神居の住民が信仰し維持されてきた。場所は蘭泊坂の上であり、漁場の真上に当る位置で昭和30年頃まで堂があったが老朽化し、どの位の大きさであったかは不明であったが台風により破損したので、神居のこの近所に居住していた矢淵さんが引取りお守りをして数年後に現在の浜側に住んでいた下家宅に10年以上祭祀し預かった、矢淵氏の後下家宅の移る間の1時松森氏宅にも預ったと言われている。

その後の昭和50年9月祭礼日を期して、小坂市蔵氏等ら発起人となり、現在の祠堂「不動院」を建立している。

寄進者板を次に記すると

不動院建立寄進者名

建造物一式 小坂市蔵。 内装建材一式 浜口千代。

金参万円也 下家みわ。金壹万円也 米本とわ。金壹万円也 菊地 正。金五千元也 齊藤正志

金貳千元也 齊藤 翠

幟一對 小坂由造。 幕一張 中条 茂。 吹流し一對 下家利作。
昭和五十年九月佳日、ととなっている。

奉納寄進物等

奉納寄進物としては、上記の他に、賽銭箱で大きな47×24×28センチ米(高さ)のもので「大正五年正月二十日新製 蘭泊 藤原新之助」とあり、また、平太鼓で直径30センチ米のものが祭具として「リン」とが正面左右に配置されている。寄進者は「今堀作太郎」とあって、年代は大正五年一月になっている。

他に「不動尊掛軸」「錫状」のようなものもある。

祭礼行事について

毎年9月28日に年祭を執行し、現在では10名余りの参詣者があり、司祭者は、前川モヨ氏とか清水ツル氏等神居在住の「稻荷」「三吉」の可祭者に依っているという。

また、郷土祭典時には特に祭礼行事は行なわれていないが、幟や吹流しを立て、供物を供えている。

毎月28日の不動の日には供物あげ小坂氏はお参りしている。供物はお菓子類や果物で他は余り供えられない。

信仰内容等について

当所は鯨大漁を願う神ではなかったかと言われているが、現在では家内安全ともいうべき信仰のように考えられる。それは、小坂市蔵氏を中心に、土別市の霊水山・不動院に信者達が年一回志納金を寄付しており、祈祷札。星供養札等の配付を受けている。それに依ると「転禍為福」「祈願成就」の文字があり、金欄表具の不動掛軸が掲げてある床の間に祭祀されている事から考えられる。

また、参詣者は殆どが老令女性で占められる、と言われている事を考えると、家族の安全、幸福を願う老令女性の心情ではないかとも言える。

ま と め

(1)島内における金毘羅信仰の始りは、稻荷、龍神の各信仰が早く受容され、広く漁業者一般に普及し、その信仰の土壌は明治初頭より培われてきている。

しかし、祠堂建立に至っては多い場合が多い。従って現在、祠堂を有し祭祀信仰されて地域をみると、利尻町特に杓形地区に集中している。東利尻町では鬼脇地区一か所だけにみられるが、創立年代が最も古い。

創始者または現信者の先祖の出身地は特定されず普遍的な広がりがあるが、出身地的特徴はない、だが、他の民間信仰と比較して強固な信者は少なくないが、信仰心もたらす祭礼行事や維持運営は整然したものがある。

部落神社として位置付けられている、杓形字栄浜、種富町の金毘羅信仰は他の信仰集団による信仰に比して希薄であると言います。

奉納寄進物については比較的少なく、年号、寄進者名等記されていないものがある。

殆どの場合、仏教各宗派寺院に属しているが（一部を除く）これらについても、他の民間信仰との重複信仰者も多いが、異和感、抵抗感、奇異なものは全くと言ってよい程なく信仰し、祭祀、維持されている。

祭具、供物、寄進物等に於ても他の民間信仰と同様で特色はない。

祭礼行事の際の司祭者は必ず、旧各村社神主に依って執行されているのは他の民間信仰の祭礼行事とは違っている。それは、他神社とは「格」が違うという自負心、意識の表れで、ある種の「心意気」を感じさせる。

(2)島内に於ける不動信仰は至る所に遍在しているが、一つの集団として、また堂宇を持って祭祀し信仰されているのは杓形字神居の不動院だけである。

駕泊大法寺に祭祀されている不動尊像は数数年前迄祠堂と共に引越移転の際に自分の檀那寺に寄進されたもので現在は信者は殆ど存在しない。

この信仰も当初は漁業神で祭祀されたとするなら、他に余り例をみない利尻島の信仰に変容したものである。それは仏教神であるという事である。従って供物は漁はなく、祭具は太鼓はあるが「りん」があってこれは仏具であり、香炉等五具足が置かれている。

しかし、仏と信じているのではなく、神道的神として信じ、靈験もそのように信じている。

創始者の由来（不動院）については不明であるが秋田県出者としては島内に於ては例がない。

この調査に御協力を願った方々は、

駕泊地区では広沢宗三、鬼脇では田淵市次郎、石川篤、杓形では成田岩吉、宮崎安太郎、小坂市蔵、西谷栄治、安田美樹穂の各氏で感謝致します。

注

- (1) 利尻町立博物館年報 第3集
- (2)(3) 北海道開拓記念館調査報告 第23号
- (4) 利尻町立博物館年報 第5集 文芸「りしり」 第4号

参考資料とした文献

1. 泉町金刀比羅神社の由来並に御守護 亦稚金刀比羅神社
2. 島物がたり 時雨音羽 宗谷観光協会 昭和23年
3. 北海道開拓記念館調査報告 第24号 北海道開拓記念館 1985

島内金比羅神社一覧表

名	称	所在地	創始者	出身地	創立年代
種	富町神社	杓形字種富町	兒玉毅	秋田県	明治35年
泉町	金刀比羅神社	杓形字泉町	飯沢直次郎	富山県	明治44年
鬼脇	金刀比羅神社	鬼脇市街地	不明	不明	明治19年
他を合祀した神社					
栄	浜神社	杓形字栄浜	ポロフンベ 栄浜の人々	青森県他	明治24年
他に合祀された神社					
政	泊港神社	仙法志字政泊	宮瀧 下沢 要利 一作	福井県 青森県	昭和27年

島内不動尊像並びに不動堂

名	称	所在地	創始者	出身地	創立年代
大法寺	内不動明王	鴛泊字栄町	天野磯次郎	和歌山県	明治23年
不	動院	杓形字神居	三浦長吉	秋田県	大正5年

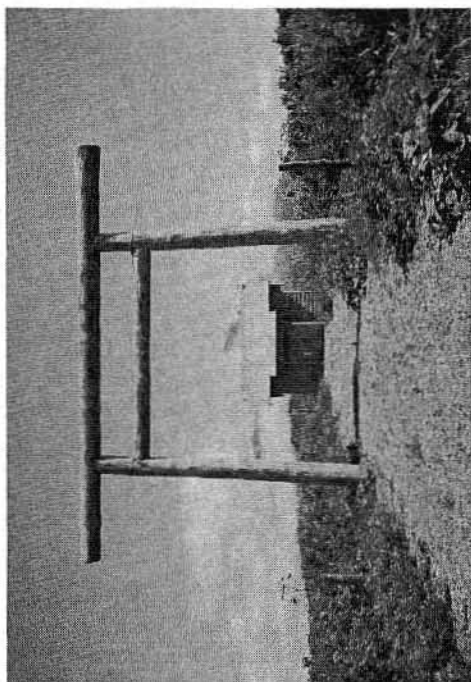


写真1 柴浜神社

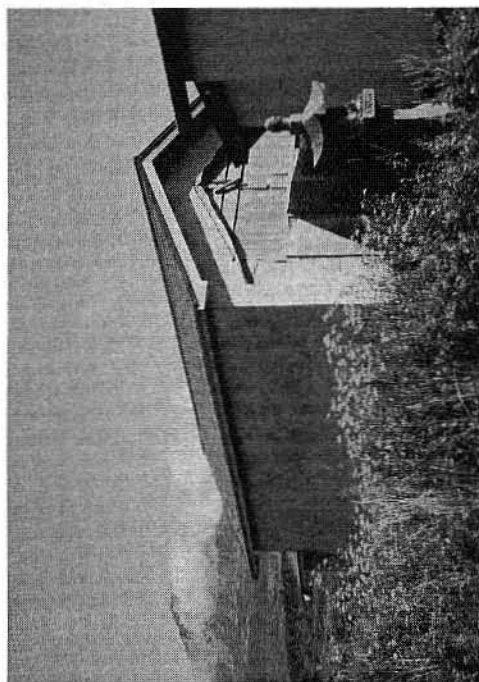


写真2 旧種富町神社(現在はこの前に新らしい自治海が建っておりその中に安置されている)

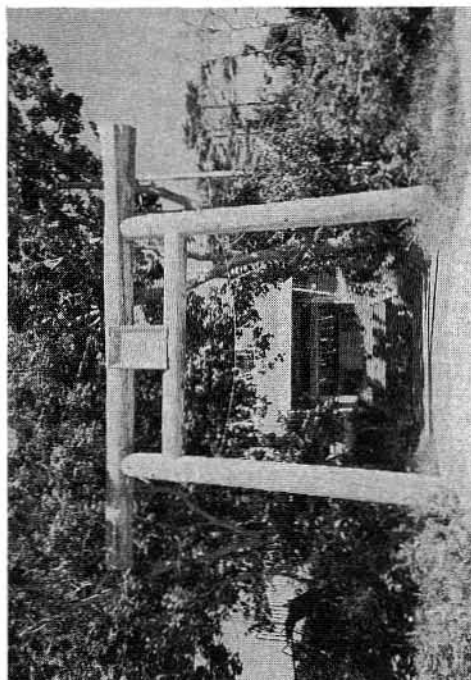


写真3 示稚(マタロッカ)金比羅神社

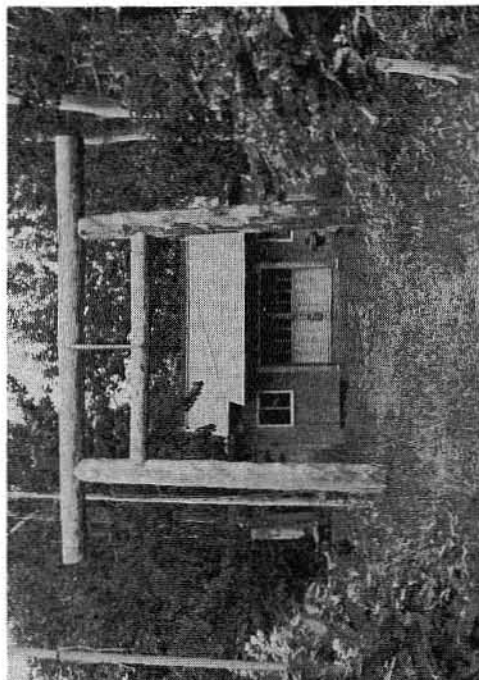


写真4 鬼脇金比羅神社

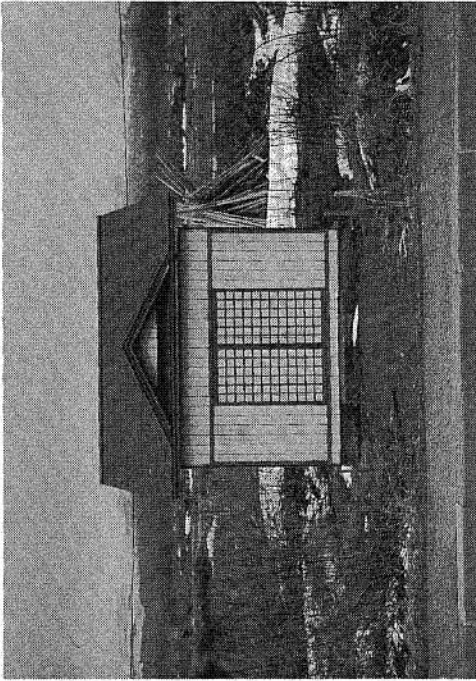


写真5 沓形神居の小坂の不動院

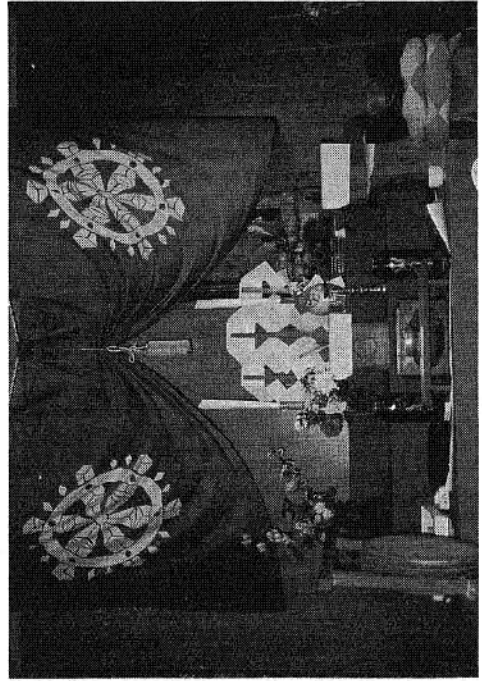


写真6 小坂不動院内部

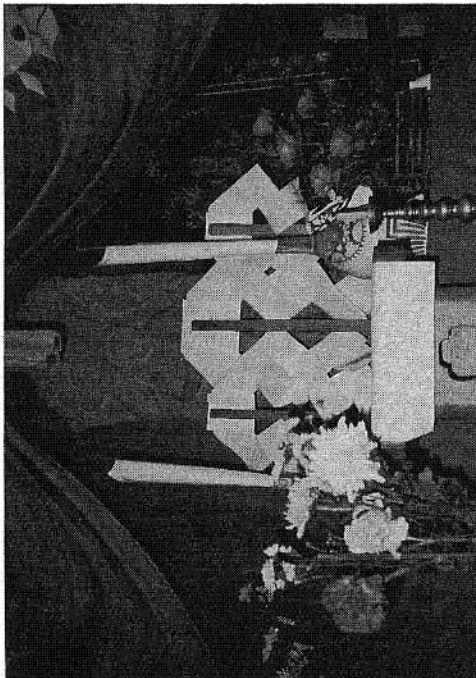


写真7 小坂不動院内部

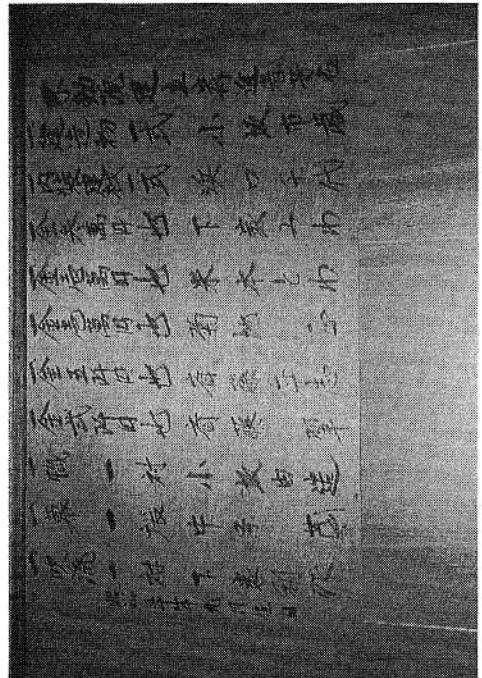


写真8 不動院建立香進者芳名(昭和50年)